様式２
【公表用】

２１世紀ＣＯＥプログラム　平成１５年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	千葉大学	学長名	斎藤　康	拠点番号	F05
１．申請分野	F〈医学系〉　G〈数学、物理学、地球科学〉　H〈機械、土木、建築、その他工学〉　I〈社会科学〉　J〈学際、複合、新領域〉				
２．拠点のプログラム名称（英訳名）	日本文化型看護学の創出・国際発信拠点―実践知に基づく看護学の確立と展開― (The Center for the Creation and Dissemination of New Japanese Nursing Science Incorporating Culturally Appropriate Care) ※副題を添えている場合は、記入してください(和文のみ)				
研究分野及びキーワード	研究分野：看護学　（看護技術）（看護倫理学）（看護教育学）（家族看護学）（地域看護学）				
３．専攻等名	看護学研究科看護学専攻、医学薬学府環境健康科学専攻 人文社会科学研究科（社会文化科学研究科、平成18年3月31日改組再編）公共研究専攻				

４．事業推進担当者　　計　12　名

ふりがな〈ローマ字〉 氏　　名	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学　位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)
(拠点リーダー) ISHIGAKI KAZUKO ①石　垣　　和　子	看護学研究科看護学専攻・教授	訪問看護学 博士(医学)	COEプログラム拠点リーダー 身体機能調整SPリーダー
MASAKI HARUE ②正　木　　治　恵	看護学研究科看護学専攻・教授	老人看護学 博士（保健学）	COEプログラム拠点サブリーダー 日本型対人援助関係SPリーダー 日本型看護効果測定ツール開発SPリーダー
MIYAZAKI MISAKO ③宮　﨑　美砂子	看護学研究科看護学専攻・教授	地域看護学 博士（看護学）	COEプログラム拠点サブリーダー 日本型地域健康支援SPリーダー
IWASAKI YAYOI ④岩　﨑　　弥　生	看護学研究科看護学専攻・教授	精神看護学 博士（看護学）	医療組織文化SPリーダー 日本型対人援助関係SP担当
KURIYAMA TAKAYUKI ⑤栗　山　　喬　之	医学薬学府環境健康科学専攻高齢医学講座・教授	呼吸器内科学 博士(医学)	身体機能調整SP担当 日本型看護効果測定ツール開発SP担当
TAKAHASHI KYUICHIRO ⑥高　橋　　久　一　郎	人文社会科学研究科公共研究専攻・教授	哲学・倫理学 修士（文学）	日本型看護効果測定ツール開発SP担当 日本型倫理的推論の特徴と看護基礎教育SP担当
NAKAMURA NOBUE ⑦中　村　　伸　枝	看護学研究科看護学専攻・教授	小児看護学 博士（看護学）	日本型家族支援SP担当 身体機能調整SP担当
FUNASHIMA NAOMI ⑧舟　島　なをみ	看護学研究科看護学専攻・教授	看護教育学 博士（看護学）	日本型看護職者キャリア・ディベロップメント支援システムの開発SPリーダー
MAJIMA TOMOKO ⑨真　嶋　　朋　子	看護学研究科看護学専攻・教授	成人看護学 博士（看護学）	日本型対人援助関係SP担当 日本型家族支援SP担当(H16.4. 1追加)
MORI EMI ⑩ 森　　恵　美	看護学研究科看護学専攻・教授	母性看護学 博士(医学)	日本型家族支援SPリーダー 日本型倫理的推論の特徴と看護基礎教育SPリーダー
YAMAMOTO TOSHIE ⑪山　本　　利　江	看護学研究科看護学専攻・教授	基礎看護学 博士（看護学）	身体機能調整SP担当、日本型倫理的推論の特徴と看護基礎教育SP担当(H18.4. 1追加)
SA TO REI KO ⑫佐　藤　禮　子	看護学研究科看護学専攻・教授	基礎看護学 博士（看護学）	日本型対人援助関係SP、日本型日本型看護職者養成・発達支援システムの構築SP担当(H16.3.31交替)

５．交付経費（単位：千円）千円未満は切り捨てる　（　　）：間接経費

年　　度(平成)	１５	１６	１７	１８	１９	合　　計
交付金額(千円)	97,000	76,200	81,600	76,250 (7,625)	75,000 (7,500)	406,050

６．拠点形成の目的

本拠点は、日本文化を反映した看護学の学問体系構築を中心にすえ、日本国民の生涯を通じた健康と生活の質の向上に貢献するとともに、グローバリゼーションの進む地球上の各国に向けて、**文化を反映した看護学**の重要性を発信すること、そしてその研究･発信を担う研究者・実践者･教育者の育成を目的とした。

＜国際性＞

本拠点の目的とする日本文化を反映した看護学の学問体系構築は、日本文化における日本人特有の援助関係形成の解明にとどまらず、諸外国の看護学においても各国の文化を反映した看護学の構築へとつながるものである。現在世界的に主流となっている欧米型の看護学への傾倒から脱し、発展途上国などの保健医療整備にあっては、伝統的な文化の破壊を最小限にとどめ、対象者により適した医療看護が提供可能となり、また、欧米諸国においても多様な文化を尊重した看護実践の導入が可能となる。

そこで国際シンポジウムや学会発表などを通して、それぞれの文化を反映した看護実践の重要性を発信する。

＜学際性＞

対人援助が基盤となる看護学は、個々人の生活や考え方の背景となる文化的側面を重視する必要性がある。日本文化や生活習慣を反映したわが国独自の看護学の体系化を行うにあたり、看護学だけでなく医学や心理学、あるいは文化人類学や社会学、哲学など幅広い学問領域と連携して研究を進める必要があった。そこで従来の学問体系では実現できなかった学際的な研究を進めるために、当拠点は医学薬学府、人文社会科学研究科と連携し、三者一体となって漸新で質の高い成果を追求した。

＜世界最高水準＞

日本は欧米諸国と比べて各人の文化的差が少なく、また生活レベルも差が少ないなど、民族的文化だけでなく個々人のもつ文化をも背景とした対人援助について研究しやすい環境にあるといえる。また本拠点の中心となる千葉大学看護学部は、これまで多くの看護実践知研究の蓄積を有している。この知見を組織的に研究することにより、日本人個々人のもつ文化を反映した看護学を明らかにすることが可能となると考えた。世界的に見ても民族単位の文化差に着目した研究は存在していたが、各個人の文化に配慮した看護研究というのは前例がなかった。本拠点は日本文化に限らず各個々人の文化を背景としたきめ細かい看護学を体系的に研究する世界有数の拠点となることを目指した。

＜研究･教育＞

本拠点は研究･教育対象として3つの領域を想定した。すなわち看護学専攻の学生、文化社会科学研究科及び医学薬学府の学生、そして看護実践者である。看護学専攻の学生には本拠点の研究の全ての過程に様々な形で参加することにより、本拠点の研究目的の達成にとどまらず、広く看護学の進展を視野に入れた研究実践能力を獲得させる。文化社会科学研究科所属者は特に研究成果の二次的分析や日本文化型看護倫理基準、対人援助関係の分析に参加することにより、本拠点の研究を促進するだけにとどまらず、日本文化型看護学の創出を通じた学際的な学問領域への理解を深めさせる。看護実践者に対しては本拠点で開発された指標や教育システムを提供することにより、文化に配慮した看護実践を可能とし、看護専門職のケアの質の向上につながることを目指す。また上記の教育を行う看護教育者も育成も目的とする。

７．研究実施計画

１）研究拠点形成実施計画

(1) 研究組織の編成

本拠点は「実践知に基づく看護学の確立と展

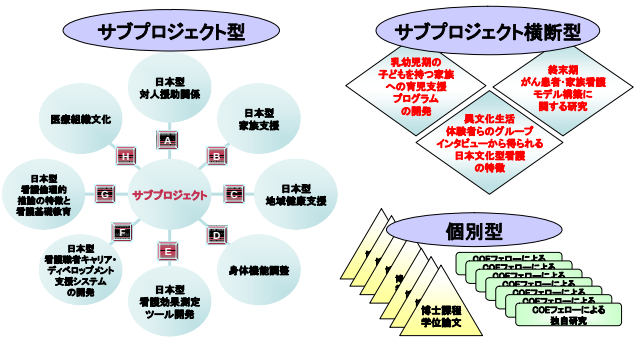

図1　研究組織の編成

開」に向けて、「サブプロジェクト型」「個別型」「サブプロジェクト横断型」との３つの研究グループからなる組織を編成した（図1）。

①サブプロジェクト型

本拠点は「援助技術の統合･体系化」プロジェクトの元に複数の看護専門領域の研究者で構成する5つのサブプロジェクト(以下SP)、「看護職者養成方法論構築」プロジェクトの元に2SP、計7SPによる研究で開始する。中間評価のコメントを受け、平成17年度より新たに「医療組織文化」SP-Hを設けた。また、平成17年度をもって「日本型QOL測定ツール等開発」SPは当初の研究目標を達成したことにより、所属メンバーは各SPに再編入された。

②個別型

若手研究者を育成するために、COEフェローと博士後期課程学生を対象に特別研究奨励費を配分する。各自が所属するSPと平行して個別に研究を行う。

③サブプロジェクト横断型

平成18年1月に拠点内で公募を行い、SP横断的な研究組織を3つ発足させ、同年4月より焦点化した研究を行った。

上記の研究組織をもって、実践型研究の強化に重点を置き、多くの実践知を収集し、質的統合分析などを行い、看護モデル等の開発・検証を行なう。また、海外の看護研究者との比較研究や討議および、国際シンポジウムの開催などを通して、日本文化型看護の基調となる看護実践の文化的視点を見出す。それらの研究成果を体系書としてまとめる。

(2) SP間の有機的連携

本COE拠点の研究は、各SPの間で有機的な連携を図りながら効果的に推進する。

２）年度別の具体的な研究拠点形成実施計画

(1)平成15年度：研究グループの組織化と実践知プール(データベース)の整理

①蓄積された先行研究から必要な実践知を抽出するための当研究科の過去の博士論文全文等のデータベース作成。

②国際シンポジウムの開催。

(2)平成16年度：メタ研究方法開発、不足する実践知の追加研究の実施

①質的研究のメタ研究方法の開発

②評価尺度の作成：SP-Eでは看護効果を測定するQOL尺度、SP-Fではキャリアディベロップメント評価尺度を作成する。

③日本各地域の文化差を考慮した看護実践知の特徴を明らかにするための一次研究の実施。

④国際シンポジウムの開催

(3)平成17年度：当初計画の継続と中間評価後の計画変更

①中間評価に基づく「医療組織文化」SPの新設。

②中間評価に基づく文化差を明らかにしやすいテーマでの一次研究の充実

③海外共同研究の準備と実施。

④各SPで開発された看護モデルの有効性の検証。

⑤国際シンポジウムの開催。

(4)平成18年度：実践研究のさらなる推進

①実践研究とメタ研究の結果を日本、及び海外研究者と吟味検討を行なう。

②海外共同研究や学際研究者との吟味の継続。

③実践現場での看護モデルの検証。

④国際シンポジウムの開催

(5)平成19年度：前年度計画の継続及び研究成果の集大成

①日本文化型看護学の統合と、体系書の作成。

②国際シンポジウムの開催

８．教育実施計画

本拠点は文化を反映した看護学の創出と国際発信拠点を形成するにあたり、学際的な知識を身につけた世界レベルで活躍する若手研究者を育成すること目的とし、研究者育成制度を導入した。そのため、①研究の全ての過程において看護学専攻の学生教育を行うこと、②研究のいくつかの過程において医学研究院,社会文化科学研究科の学生教育を行うこと、③看護実践職者への教育を行うことを計画した。

1.看護学専攻の学生教育

①実践知のプールから二次的分析に採用する研究を選択する段階、②それらの二次的分析を実際に行う段階、③実践の影響を客観的に示す指標を開発すること、④指標を実践現場で活用して実践影響を客観的に示すことなどの全

ての研究過程と、⑤国際シンポジウム開催に看護学専攻博士後期課程の学生を可能な限り参加させる.これらには医学研究院,社会科学研究科の考え方や方法が加味されており,従来より広い視野、深みのある思考を伴った教育がなされる.

５年計画の拠点形成であり、学生個人にとってみれば在学期間中に全ての段階を学習することはできないが,少なくとも看護学が向かう方向性が実践知の抽出にとどまらないことを学習することができる.また、１学年９名である博士後期課程の卒業生の少なくとも三分の一程度には継続してこの拠点に残ることを奨励し,また嘱望されて他大学の教官として就職していく者にもこの拠点とネットワークを作って研究を継続することを奨励する.１４条適用で在学している者も同様に卒後も自職場から研究者として参加することを奨励する。そのことによってこの拠点の全コースを同時進行で体験することが可能になると考える。

さらに１学年２６名の看護学専攻博士前期課程の学生には,この拠点の成果を常にフィードバックし,前期課程の修士研究において、①の実践知のプールから二次的分析に採用されるような質を持った実践知抽出の研究を行うことを教育し,また③の実践の影響を客観的に示すことに真に活用できるような指標を開発するような研究を行うことを教育する.拠点の事業推進担当教官（前期課程の教官と共通）がこの拠点の研究にかかわることによって,自己の研究能力や教育能力を高め、相互の研究目標の関係性が共有でき、博士前期課程教育においてもこのような波及効果があると思われる.また前期課程の教育において優秀な学生を引き続き後期課程に入学させる.

国際シンポジウムには教育の一環として出席させ,日本型看護学への理解を深め国際感覚を身に付けさせる。

2.医学研究院,社会文化科学研究科の学生教育

前項に示した全ての段階において医学研究院、社会文化科学研究科の学生教育を行うことが可能ではあるが、①の看護実践知の研究を選択する段階は実践現場を熟知した看護学専攻の学生が行うことが望ましいと思われる。②の二次的な分析、③の指標開発、④の実践現場での検証の研究は、社会文化科学研究科の医療現場に関心を持つ学生や医学研究院学生の教育の場ともする。両専攻の学生には、特に日本型看護倫理基準の分析や日本型対人援助関係の分析、日本型家族支援、身体機能調整、援助及び教育に対する指標開発がよい教育素材になると思われる。

3.看護実践職者への教育

④の段階は医学部附属病院をはじめとした千葉県下の医療施設や自治体の持つ保健機関などとの共同研究として行う。従って、分析に基づいた日本型援助関係、日本型家族支援、日本型地域健康支援、身体機能調整、看護職者養成、日本型倫理基準の現場への当てはめや指標を用いた実践の影響の測定などは、そこに働く看護専門職の質の向上につながる教育になることを念頭において行う。

９．研究教育拠点形成活動実績

①目的の達成状況

1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

評価は「２．目的は概ね達成した」とした。

日本文化型看護学の創出を通して、文化を反映した看護学を追及・構築する世界初の拠点を形成した。また、国内30以上の大学ならびに海外7カ国（中国、フィンランド、米国、タイ、韓国、英国、スウェーデン）10大学と共同研究を行い、連携拠点として新たに2カ国3大学と学術交流協定を結んだ。英国の看護学の教科書に本拠点の研究成果が引用され、海外の大学からの講演依頼が来るなど、日本の看護研究の国際的評価が高まった。以上より、想定通りの成果をあげたことから「２．目的は概ね達成した」と評価する。

2)人材育成面での成果と拠点形成への寄与

人材育成は「研究能力の向上」「国際性と文化的能力の涵養」という２つの理念に基づいて行なった。具体的にはCOEフェロー、RA、特別研究奨励費の公募を通じて若手研究者の研究環境の整備を図るとともに、東アジア圏の学生やフェローを採用することにより国際的な共同研究、並びに研究発表が格段に促される結果となった。また、社会文化科学研究科修了者を

登用することにより学際的な視点から研究する能力を養った。さらに各研究者が国際共同研究プロジェクトのメンバーとして研究に参加することで、国際的な研究拠点形成を主体的に担うことのできる人材が育成された。

3)研究活動面での新たな分野の創成や、学術的知見等

本拠点の成果として、文化を反映した看護学であるところの**「文化看護学」という新たな学術分野**を創出した。本拠点の出発点としては日本文化に根ざした看護学の特徴を明らかにすることにあったが、その過程で様々なレベルの文化の存在を明らかにし、その文化を反映した看護学の創出のための方法論が蓄積さていくに従い、その方法の国際的、学際的普遍性が明らかとなり、今までの看護学の枠組みには収まらない「文化看護学」を創出するに至った。
本拠点ではその成果を体系的に提示するために、申請当初から計画していた体系書を作成した。体系書は「総論・理論編」と「各論・実践編」から構成され、看護学の研究者・教育者・実践者だけにとどまらず、文化に関するあらゆる領域の研究者に活用される内容となる。そのうち「総論・理論編」にあたる『日本文化型看護学への序章』が2008年2月に出版された。

4)事業推進担当者相互の有機的連携(図2参照)

本拠点は、採択当初から拠点リーダー1名、拠点サブリーダー2名を定め、月平均1回の推進担当者会議、月1回のフェロー連絡会を行なった。推進担当者の中には医学薬学府、並びに人社会科学研究科所属の担当者が含まれており、運営上においても学際的な連携が行われた。

また研究面においても、SPごとの研究会は月1回以上、SP中の研究班の活動は常時行なわれた。SPは看護の対象（個人、家族、地域）及び看護実践（対人援助関係、身体機能調整）、看護の提供主体（看護教育、看護倫理）の観点から構築されており、従来の看護学の専門領域を超えた横断的な組織編成下で研究を推進してきた。また、すべてのSPに直接的・間接的に関係する「医療組織文化」は設置当初、対人援助関係のSP内に位置付けられていたが、中間評価を受けて独立したSPとし、成果を全体に還元しながら研究を推進した。それにより、研究の過程を通じた教員の相互理解が深まり、文化的視点の広がり、研究能力が向上するとともに、討論を通して、総合的な体系化に向かった。また社会文化科学研究科博士後期課程修了生をCOEフェローとして雇用し、共同研究を行うことにより、研究成果の広がりや深まり及び博士後期課程在学者及びCOEフェローの文化的能力の向上に繋がった。

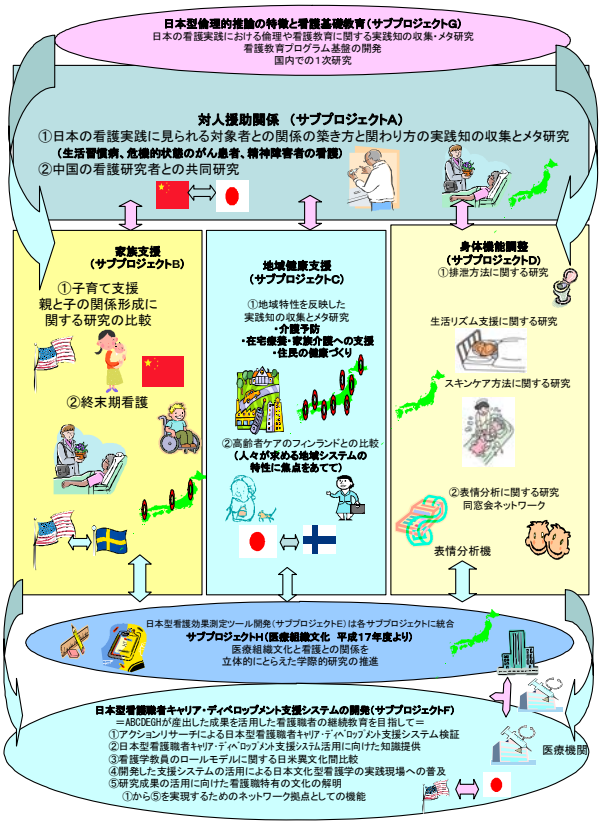

図２　本COE拠点の有機的連携

5)国際競争力ある大学づくりへの貢献度

COEフェローとして看護学研究科ならびに人文社会科学研究科修了者、延べ13名を雇用し、うち、3名が中国からの留学生であった。それにより、中国との共同研究や学術的交流が飛躍的に進み、**本拠点の国際的認知度が向上**した。また、外国人非常勤講師を雇用し、若手研究者を対象に、英会話、国際学会における口頭発表、論文発表の英文記述に関するレッスンの支援を行なった。それにより国際学会での発表が増加するなど、**若手研究者の国際的研究活動の基盤が整った**。

6)国内外に向けた情報発信

(1)国内外の交流による情報発信

国内外に向けた情報発信として、以下の通り国際シンポジウムやワークショップの開催、海外研究者の招聘や国内外に招聘された講演の実施および、国内外での研究発表を行った。

①国際シンポジウムの開催（4回）

・第1回国際シンポジウム「Cultural Diversity And Nursing 文化の多様性と看護」（2004年2月20日）
・第2回国際シンポジウム「Meta-Study of Clinical and Community Care Knowledge 実践知の抽出と統合」（2005年2月19日）
・第3回国際シンポジウム「The Creation and Verification of Knowledge 知の創出と検証」（2006年2月20日）
・第4回国際シンポジウム「Culturally Relevant Nursing Science-Exchange and Dissemination of research findings and advances 文化に根ざした看護学―成果の共有と発信」（2008年11月23日・24日）

②ワークショップの開催（6回）

・「食にまつわる看護の文化比較」国際ワークショップ（2006年3月14日）
・「アジア文化と看護倫理教育」国際ワークショップ（2006年10月22日）
・「乳幼児期の障害のある子どもと家族を支援する」ワークショップ（2007年2月17日）
・「終末期がん看護」国際ワークショップ（2007年2月19日）
・「高齢者のエンパワーメントと地域のサポートネットワークー地域文化に根ざした介護予防実践に向けてー」国際ワークショップ（2007年7月21日）
・「魅力的な院内教育プログラムの実現」ワークショップ（2007年9月23日・24日）

③海外研究者の招聘

本拠点が5年間で招聘した研究者は、10カ国から34人にのぼった。看護にとどまらず、哲学・文化人類学・教育学など多領域からの招聘者によるシンポジウム、ワークショップ、更には大学院生に対するゼミやグループミーティングを通して、文化と看護について討議を進めた。

④国内外に招聘された講演の実施

6人の事業担当推進者が国内外の講演会及び学際的・国際的な学会などに招聘された。

⑤国内外での研究発表

本拠点の研究業績は表1の通りである。

表1　本拠点5年間研究業績の統計（単位：件）

年分	原著	学会発表	報告書	単行本	総説・短報・実践報告・資料・その他	計
2003年	7(1)	16(1)	0	0	3	26(2)
2004年	17	37(12)	9	4	12	79(12)
2005年	28	92(24)	13	0	20	153(24)
2006年	36	108(42)	25	1	26	196(42)
2007年	38(3)	115(40)	24	8	43	228(43)
計	126(4)	368(119)	71	13	104	682(123)

注：右側の( )は内数で海外雑誌や国際学会での発表の数を示す

原著や国内外での学会発表などを含めた研究業績は年々増加し、初年度の26件から最終年度の228件のぼった。5年間の682件の研究業績に海外雑誌や国際学会での発表が123件であった。そのうち、本拠点の11人の研究者は「研究論文奨励賞」や学会発表の口演「最優秀賞」と「ポスター賞」などが授与された。

⑥国内外での新聞報道

本拠点の研究活動に関する新聞記事は、国内で取り上げられたのが5件、国外で取り上げられたのが2件であった（フランス・中国）。

⑦質的研究のメタ統合による理論開発

質的研究メタ統合という研究手法により、より広範囲な理論、看護モデルを導いた。欧米に比し、日本ではまだこの方法は行われておらず、当拠点が最初に取り組んだものである。我々の成果発表とともに、近年日本でも関心が高まっており、そのきっかけを与え学術的貢献をした。

⑧学位論文のデータベース作成

上記のメタ統合という研究方法によって質的研究から広範な新理論を創出することは、対人支援のための実践的学問構築にとって今後必須の作業と思われる。当拠点ではメタ統合のための知の宝庫である看護学研究科の学位論文を過去にさかのぼってデータベース化し、そ

の後も継続してデータベースの充実を図っている。今後は1大学のみでなく、全国の大学に広げてデータベースを充実させる方向性を考えている。

(2)出版した体系書による情報発信

本拠点では文化を反映した看護学を明らかにし、国際発信すべく、5年間の研究の集大成の一つとして、『日本文化型看護学への序章』を出版した。これは、日本文化型看護学とは何かを追究するための道筋を示したものであり、研究者が人々の文化を理解して看護実践を行うための手法を、研究の具体的なデータや、実践事例を交えて示したものであり、これまで出された看護理論書や解説書とは異なるユニークな内容が含まれている。今後、看護と文化とのつながりを考えながら、研究や実践を行う看護職の指針として有益な資料であると考えられる。更に、この本をもとに、国内外の研究者・教育者・実践者と交流し、この成果を発信するとともに、文化看護学の重要性を発信していく。

(3)設立した文化看護学会による情報発信

本拠点は「文化看護学」という新しい学術領域の確立に向けて連携協働できる人々との活動拠点として、平成19年11月24日に「文化看護学会」を設立した。日本文化型看護学の創出を通して、文化を反映した看護学を追究・構築する世界初の拠点を形成できたことは間違いない。この5年間に、国内30以上の大学ならびに海外7カ国（中国、フィンランド、米国、タイ、韓国、英国、スウェーデン）10大学と共同研究を行い、更に連携拠点として新たに2カ国3大学と学術協定を結んだ。英国の看護学の教科書に本拠点のSP-Gの看護倫理教育に関する研究成果が引用され、その他にも海外の大学からの講演依頼が来るなど、日本の看護実践知とそれに基づく成果が国際的に発信され、私たちの追究している文化を反映した看護学が海外においても認知されるところとなった。それらの国際発信の過程を通して、海外の看護研究者から、文化を反映した看護実践とその基盤となる看護学構築の重要性について、賛同と目的達成に向けた継続的な連携と共同への意思が確認できたことも成果である。

(4)その他の情報発信

本拠点は開設当初から専用ホームページを立ち上げ、研究拠点の活動を情報発信した。特に国際シンポジウム開催時には、ホームページ上での参加者の募集など、積極的活用を行った。また、年3回程度のニューズレターを発行し、国内の看護系大学、並びに関係するCOE拠点に送付することにより、本拠点の成果と活動を定期的･継続的に発信した。

7)拠点形成費等補助金の使途について（拠点形成のため効果的に使用されたか）

補助金の３分の１は、若手研究者であるCOEフェローの雇用に使用され、その他、国内外の共同研究実施のための旅費、研究成果公表のための交際学会参加旅費、博士後期課程学生の研究費補助、情報発信のためのホームページ費用、国際シンポジウム開催費用などに使用された。結果、研究面では国際的な研究プロジェクトが実践的で効果の高いプログラムを構築することとなり、教育面では若手研究者が当初の想定以上に独立して研究する能力が涵養され、拠点形成の目的を効果的に達成することとなった。

②今後の展望

本拠点は対象者個人の文化を反映した看護という「文化看護学」を創出するという、世界的にも類を見ない研究を、大規模な組織体制の有機的な連携により行ってきた。今後は本拠点の成果を基盤に、「文化看護学」の確立と体系化、並びに文化看護学を研究する学際的･国際的な能力の高い研究者の育成を続行する予定である。

また、今後この成果を平成１９年度から開始された看護学部・医学部・薬学部連携教育に反映し、広く医療職育成の基盤づくりに活用する。

③その他（世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度）

文化を反映した看護学の重要性や効果が認知され、文化的要素を含んだ看護研究やセミナー等が増加した。また、国内外の看護学研究者からの注目が集まり、拠点の成果と関連するテーマでの招聘講演の機会が増えた。

２１世紀ＣＯＥプログラム　平成１５年度採択拠点事業結果報告書

機　関　名	千葉大学	拠点番号	F05
拠点のﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ名称	日本文化型看護学の創出・国際発信拠点―実践知に基づく看護学の確立と展開―		

１．研究活動実績

①この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】

・事業推進担当者（拠点リーダーを含む）が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等〔著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの〕）
・本拠点形成計画の成果で、ディスカッション・ペーパー、Ｗｅｂ等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの
※著者名（全員）、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年（西暦）の順に記入
波下線（　　）：拠点からコピーが提出されている論文
下線（　　）：拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生

【原著】

1) Ishigaki, K., Masaki, H., Nakamura, N., Miyazaki, M. & Yamamoto-Mitani, N.: The Current State of the Center for the Creation and Dissemination of New Japanese Nursing Science: the 21st century Center of Excellence at Chiba University School of Nursing, Japan Journal of Nursing Science, 3(1), 77-82, 2006.

2) 石垣和子：家族看護実践の展開　文化や社会に焦点を当てて．家族看護学研究，11(3)，116-120，2006.

3) 石川かおり，岩崎弥生：地域で生活する精神障害者を対象とした対人援助方法に関する文献研究．千葉看護学会会誌，10(2)，8-16，2004.

4) 天谷真奈美,岩崎弥生:社会的ひきこもり青年を抱える親への看護援助に関する研究-エンパワメントの観点から-.千葉看護学会会誌,12(1),79-85,2006.

5) 岩崎弥生：「病いの語り」の精神看護への適用：人生を意味づける．立命館ヒューマンサービスリサーチ「病い」への人文・社会科学的アプローチ，50-62，2006.

6) 井出成美，石川麻衣，宮崎美砂子：住民の援助ニーズに応じた地域ケアシステム構築における行政保健師の看護実践知の創出ー研究成果のメタ統合ー．千葉看護学会会誌，11(2)，8-15，2005.

7) 山田洋子，井出成美，宮崎美砂子：生活習慣病予防における行政保健師の看護実践知の創出ー研究成果のメタ統合ー．千葉看護学会会誌，12(2)，57-62，2006.

8) 金丸友，中村伸枝，荒木暁子，中村美和，佐藤奈保，小川純子，遠藤数江，村上寛子：慢性疾患をもつ学童・思春期患者の自己管理およびそのとらえ方ー質的研究meta-studyを用いてー．千葉看護学会会誌，11(1)，63-70，2005.

9) 佐藤奈保，荒木暁子，中村伸枝，金丸友，中村美和，小川純子，遠藤数江：障害をもつ乳幼児の家族の日常生活における体験に関する研究　家族のノーマリゼーションを視点としたmeta-study．千葉看護学会会誌，11(1)，71-78，2005.

10) 中村美和，中村伸枝，荒木暁子：ターミナル期にある小児がんの子どもを抱える家族の体験ー緩和ケアに立脚した看護援助指針の作成に向けた看護師に対する面接調査ー．千葉看護学会会誌，12(1)，71-77，2006.

11) 中村美和，中村伸枝，荒木暁子：小児がんの子どもと家族に対する症状マネジメント看護援助モデルの構成概念と介入の枠組み．千葉看護学会会誌，13(1)，44-52，2007.

12) 清水安子，黒田久美子，内海香子，正木治恵：糖尿病患者のセルフケア能力の要素の抽出ー看護効果測定ツールの開発に向けてー．千葉看護学会会誌，11(2)，23-30，2005.

13) 田所良之，菅谷綾子，榎元美紀代，清水安子，正木治恵：日常生活上の改善を要するが切迫感を抱きにくい対象者への対人援助技術ー国内文献にみられる知見の統合ー．千葉看護学会会誌，11(2)，39-47，2005.

14) 正木治恵，清水安子，田所良之，谷本真理子，斉藤しのぶ，菅谷綾子，榎元美紀代，黒田久美子：「日本型対人援助関係の実践知の抽出・統合」のための理論的分析枠組みの構築．千葉看護学会会誌，11(1)，55-62，2005.

15) 瀬戸奈津子，山本郁子，岡崎優子，岡田ゆかり，河井伸子，坂井さゆり，森小律恵，清水安子，正木治恵：看護ケアを捉える文化的枠組みの構築ー海外文献による文化的視点の明確化ー．千葉看護学会会誌，12(1)，65-70，2006.

16) 張平平，正木治恵：高齢患者の服薬アセスメントツールの開発ー中国での活用を前提としてー．老年看護学，11(2)，48-55，2007.

17) 佐藤まゆみ，増島麻里子，柴田純子，神間洋子，櫻井智穂子，眞嶋朋子，小坂美智代，伊藤道子，本田彰子：終末期がん患者を抱える家族員の体験に関する研究．千葉看護学会会誌，12(1)，42-49，2006.

18) 舟島なをみ，三浦弘恵，亀岡智美：病院に就業する看護師の学習ニードに関係する特性の解明ー院内教育のあり方の検討に向けてー．日本看護学教育学会誌，15(2)，13-23，2005.

19) 山本則子，岡本有子，鈴木育子，岡田　忍，石垣和子：高齢者訪問看護における家族支援に関する質指標の開発．家族看護学研究，13(1)，19-26，2007.

20) 大月恵理子，森恵美，中村康香，林ひろみ，中野美佳，陳東，前原邦江：日本における妊娠期の母親役割獲得を促す家族看護の構成概念，千葉看護学会会誌，12(1)，50-57，2006.

【単行本】

21) 石垣和子：千葉大学21世紀COEプログラム日本文化型看護学の創出・国際発信拠点代表石垣和子：日本文化型看護学への序章―実践知に基づく看護学の確立と展開．1章　日本文化型看護学の前提と背景，1-4，医学書院出版サービス，2008.

22) 石垣和子千葉大学21世紀COEプログラム日本文化型看護学の創出・国際発信拠点代表石垣和子：日本文化型看護学への序章―実践知に基づく看護学の確立と展開．2章　日本文化型看護学創出のための方法論，Ⅰ．実践知の抽出（暗黙知→形式知）・統合・理論化へのプロセス，5-13，医学書院出版サービス，2008.

23)宮﨑美砂子（分担）：千葉大学21世紀COEプログラム日本文化型看護学の創出・国際発信拠点代表石垣和子：日本文化型看護学への序章―実践知に基づく看護学の確立と展開．7章　「社会・組織」と看護、Ⅰ．　看護を取り巻く社会・組織，177-181；9章　「日本文化型看護学」の着目から「文化看護学」構築へ，Ⅰ．　文化看護学の国際発信，222-225，医学書院出版サービス，2008.

24)眞嶋朋子（分担）：千葉大学21世紀COEプログラム日本文化型看護学の創出・国際発信拠点代表石垣和子：日本文化型看護学への序章―実践知に基づく看護学の確立と展開．6章　「健康・生活の営みに関する価値観」と看護，Ⅴ．　死に向かう体験・価値観とその看護―終末期がん患者と家族の体験における価値観を考慮に入れた看護についての考察，163-167，医学書院出版サービス,2008.

25)舟島なをみ監修：看護実践・教育のための測定用具ファイル―開発過程から活用の実際まで―．医学書院，2006.

26)舟島なをみ編著，三浦弘恵著：院内教育プログラムの立案・実施・評価―「日本型看護職者キャリア・ディベロップメント支援システム」の活用―．医学書院，2007.

27)山本利江（分担）：千葉大学21世紀COEプログラム日本文化型看護学の創出・国際発信拠点代表石垣和子：日本文化型看護学への序章―実践知に基づく看護学の確立と展開．4章　「身体性」と看護、Ⅱ．　ケアとの関連で捉える身体性,A.　身体ケアから見た人間の捉え方,83-86,医学書院出版サービス,2008.

28)森恵美（分担）：千葉大学21世紀COEプログラム日本文化型看護学の創出・国際発信拠点代表石垣和子：日本文化型看護学への序章―実践知に基づく看護学の確立と展開．２章　日本文化型看護学創出のための方法論，Ⅰ．　実践知を活用した看護モデルの開発と検証,13-21；Ⅳ．　日本文化型看護学の創出のための国際共同研究・国際討議,34-35；6章　「健康・生活の営みに関する価値観」と看護,Ⅱ．　産み育てることに関する価値観,146-152,医学書院出版サービス,2008.

29)高橋久一郎（編著）『岩波応用倫理学講義７　問い』全277頁、「講義の七日間」（1-75頁）,「シンポジウム応用倫理学の「有用性」」（207-256頁）提題,「応用倫理学問題地図」（257-277頁）,岩波書店,2004年．」30)高橋久一郎（単著）『アリストテレス―　――何が人間の行為を説明するのか？』全126頁,ＮＨＫ出版,2005年.

31)高橋久一郎（著）「行為の説明と理解のために,なぜ「意図」が必要なのか？」362-369．『人工知能学会誌』20巻,４号,2005年.

32)高橋久一郎（著）「アリストテレスの中庸論はどれほどバカげているのか？」『ギリシア哲学セミナー』第５集,2007年.

33)高橋久一郎（分担）：千葉大学21世紀COEプログラム日本文化型看護学の創出・国際発信拠点代表石垣和子：日本文化型看護学への序章―実践知に基づく看護学の確立と展開．6章　「健康・生活の営みに関する価値観」と看護，Ⅰ．　看護における価値観の問題141-146,医学書院出版サービス、2008.

【総説・短報・実践報告・資料・その他】

34)Ishigaki, K.: Center for the creation and dissemination of a new Japanese nursing science incorporating culturally appropriate care: Establishment and development of nursing science and arts based on clinical knowledge. Japan Journal of Nursing Science, 1, 69-73, 2004.

35)岩﨑弥生：精神看護における文化と家族看護．家族看護学研究，10(1)，52-56，2004.

36)岩﨑弥生：日本型対人援助関係の勉強会資料，平成17年度千葉大学21世紀COEプログラム拠点報告書，30-44，2006.

37)佐藤紀子，井出成美，宮﨑美砂子：地域健康支援における文化に関する文献検討．千葉看護学会会誌，11(1)，79-86，2005.

38)増島麻里子，眞嶋朋子，佐藤まゆみ，柴田純子，神間洋子，長坂育代，片岡純，小西敏子：危機的状態にあるがん患者が安寧に至ることを促す看護援助．千葉大学21世紀COEプログラム第3回国際シンポジウム,2006.

39)Masujima、M., Majima, T.,Sato, M.,et al.:Nursing Intervention for cancer patients to overcome a critical situation and become well. 14th International Conference, 131, 2006.

40)舟島なをみ他：千葉大学21世紀COEプログラムワークショップ「魅力的な院内教育プログラムの実現」抄録集，1-23，2007.

41)Funashima,N.et al.：The Construction of Theoretical Framework for Identifying Peculiar Culture of Japanese Hospital Nurses. 20th Annual Pacific Nursing Research Conference, 119, 2007.

42)荒木暁子，中村伸枝，遠藤数江：千葉大学21世紀COEプログラム「日本文化型看護学の創出・国際発信拠点－実践知に基づく看護学の確立と展開」サブプロジェクトB：日本文化型家族支援　障害のある子どもと家族の看護研究グループ企画ワークショップ「乳幼児期の障害のある子どもと家族を支援する」報告書，1-38，2007.

43)眞嶋朋子，中村伸枝：千葉大学21世紀COEプログラム「日本文化型看護学の創出・国際発信拠点－実践知に基づく看護学の確立と展開」終末期癌看護国際ワークショップ－日本文化を反映した終末期がん看護実践モデルの作成にむけて－報告書，1-73，2007.

44)岡田忍：日本人の清潔習慣に配慮したスキンケア－高齢者の入浴習慣に注目して．千葉大学21世紀COEプログラム第3回国際シンポジウム，2006. The 21st Century Center of Excellence Program. The 3rd International Symposium. The Japanese Nursing Science incorporating culturally appropriate care: The creation and verification of knowledge, 34-35, 2006.

45)岡田忍：震災下での入浴に関するインタビューと入浴困難事例に対する看護師の入浴援助についての文献的検討．千葉大学21世紀COEプログラム第4回国際シンポジウム，分科会１．2007.

46)岡本有子，鈴木育子，岡田忍，石垣和子，山本則子：排尿ケアに関する質指標の構築と標準化．看護研究，40(4)，29-44，2007.

47)鈴木育子，岡本有子，岡田忍，石垣和子，山本則子：睡眠障害へのケアに関する質指標の構築と標準化．看護研究，40(4)，45-57,2007.

48)河部房子，山本利江，和住淑子，大井紅菜：自己モニタリング・フィードバックに焦点をあてた健康自主管理支援システムの開発－システムを構成するモニタリング指標としての良導絡の検討－．千大看護学会紀要，28，35-44，2006.

49)森恵美，手島恵，酒井郁子，吉田千文，荻野雅，山本利江：千葉大学看護学部における日本文化を反映した看護倫理教育の先駆的試み．千葉大学看護学部紀要，29，61-66，2007.

50)前原邦江，森恵美：“ふれあい”を通して母子相互作用を促す看護介入プログラムの評価－出産後１～４か月の母子を対象として－．千葉大学看護学部紀要，29，9-14，2007.

51)森恵美，手島恵，酒井郁子，吉田千文，荻野雅，山本利江：千葉大学看護学部における日本文化を反映した看護倫理教育の先駆的試み．千葉大学看護学部紀要，29，61-66，2007.

52)森恵美，手島恵，山本利江，酒井郁子，荻野雅，吉田千文：ワークショップ「アジア文化と看護倫理教育」報告書，2007

②国際会議等の開催状況【公表】

（事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数（うち外国人参加者数）、主な招待講演者（３名程度））

1. **第1回COE国際シンポジウム**　平成16年2月20日（金）、千葉大学けやき会館.「文化の多様性と看護」（The first International Symposium: Cultural Diversity and Nursing）　参加人数243名（うち外国人参加者数は13名）
本シンポジウムの講演者は、特異な社会・文化的背景を持ち且つ本研究科と交流のある諸外国の看護学研究科から招聘した。主な招待講演者は、中華人民共和国から四川大学看護学研究科長Dr. Li Jiping、パキスタン・イスラム共和国からアガカーン大学看護学研究科長Dr. Yasmin Amarsi、北アイルランドからクイーンズ大学ベルファースト大学院看護・助産学研究科講師Dr. Kathy Rowe、フィンランド共和国からセイナヨキポリテクニク大学国際交流部長Ms. Helli Kitinojaである。

2. **第2回COE国際シンポジウム**　平成17年2月19日（土）、千葉大学けやき会館.　「日本文化型看護学の確立に向けて―実践知の抽出と統合―」参加人数200名、外国人招聘者1名　B. Paterson(University of New Brunswick)が「看護の質的研究のメタスタディ」について招聘講演を行った。 他に山折哲雄(国際日本文化研究センター所長)が「看取りの作法」について基調講演を行った。

3. **第3回COE国際シンポジウム**　平成18年2月20日（月）、千葉大学けやき会館、「日本文化型看護学―知の創出と検証―」参加人数200名、外国人招聘者3名　Carolyn Sampselle（ミシガン大学）が「米国における低賃金労働者問題：健康格差への看護学の挑戦」について招聘講演を行った。Diane Holditch-Davis（ノースカロライナ大学）が「乳幼児の母子相互作用と子どもの発展の関連」について、Ladawan Prateepchaikul（プリンスオブソンクラー大学）が「タイにおける親子関係と子育て」について、テーマセッションでの講演を行った。

4. **第4回COE国際シンポジウム**　平成19年11月23日（金・祝）・24日（土）、千葉大学けやき会館、「文化に根ざした看護学―成果の共有と発信―」参加人数200名、外国人招聘者5名　マリー＝クリスティヌ・プシェル（フランス国立科学研究センター：CNRS）が「フランスの医療制度における医療化と文化的相違」について特別講演を行った。ジンタナ・ユニバンド（チュラーロンコーン大学）と周宇彤（北京大学）が「看護実践における文化的視点―国際共同研究から」という題目のシンポジウム１において指定発言を行った。イル・ヤング・ヨー（ヨンセイ大学）、バリ・ドレンナン（キングストン大学・ロンドン大学、セントジョージ校）が「「文化に根ざした看護学の発展に向けて開発した研究方法」という題目のシンポジウム２において指定発言を行った。

5. **国際ワークショップ１**　平成18年3月14日（火）、千葉大学看護学部第1講義室、「食にまつわる看護の文化比較」参加人数約30名、外国人招聘3名　鄭修霞院長（北京大学看護学院）が、ワークショップの他に「中国の看護と看護教育における文化的特徴」について特別講演を行った。尚少梅副院長（北京大学看護学院）が、「中国の飲食文化」について講演した。周宇彤教師（北京大学看護学院）が通訳した。

6. **国際ワークショップ２**　平成18年10月22日（日）、千葉大学看護学部講義・実習室、「アジア文化と看護倫理教育」参加人数57名、外国人招聘1名　Won Hee Lee（Yonsei University）が、「韓国における看護倫理教育」という基調講演と「看護と倫理教育―その方法と展開」というミニシンポジウムにおいて講演を行った。

7. **国際ワークショップ３**　平成19年2月19日（月）、千葉大学看護学部講義・実習室、「終末期がん看護国際ワークショップ」参加人数112名、外国人招聘1名　Rosemary McIntyre（Napier University、UK）が、「Nursing Support for Families of Dying Patients」について基調講演１を行った。他に、米国にいる日本人を1名招聘した。和泉成子（Oregon Health & Science University 、US）が「日本の終末期看護における倫理的課題とその研究」について基調講演２を行った。

8. **国際ワークショップ４**　平成19年7月21日（土）、千葉大学看護学部講義・実習室、「高齢者のエンパワメントと地域のサポートネットワークー地域文化に根ざした介護予防実践に向けてー」参加人数87名、外国人招聘2名　Helli Kitinoja（Seinajoki University of Applied Science, Finlang）とJaakko Kontturi（Head on home care, City of Seinajoki, Finland）が、シンポジウム１「高齢者のエンパワメントと地域のサポートネットワーク」および、シンポジウム２「地域における高齢者の支援システムの現状と課題」において講演を行った。

9. **現地での国際会議**「看護学教員のロールモデル行動自己評価尺度－英語版－開発研究」第1回　H16年2月13日，米国／フロリダ州タンパ／エンバシー・スイート・ホテルUSF　参加人数5名，うち外国人1名　Patricia A. Gorzka, Ph.D., ARNP Associate Professor, University of South Florida

10. **現地での国際会議**「看護学教員のロールモデル行動自己評価尺度－英語版－開発研究－表面妥当性検討に向けた専門家会議－」第2回　H17年１月８日，米国／フロリダ州タンパ／南フロリダ大学　参加人数14名，内外国人8名　Patricia A. Gorzka, Ph.D., ARNP, Associate Professor, University of South Florida Imogene M. Kingm Ed.D., RN, FAAN, Professor Emeritus, University of South Florida.　Nancy Dieke l mann, Ph.D., RN, FAAN, Director, Institutes for Interpretive Phenomenology,George Mason University

２．教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

Ⅰ　若手研究者の人材採用

1. COEフェローの採用

【根拠】千葉大学看護学部COEフェロー選考内規（H15年9月10日制定）に基づく。

【対象】博士の学位を有する者

【選考方法】ホームページ他にて公募。履歴書、業績書のほか推進担当者による面接にて選考。

【身分】非常勤職員。初年度は原則として講師待遇。次年度以降は業績を勘案して昇格も考慮。任期1年で再任あり。

H15年度は2名採用フルタイム(週40時間)（内訳看護系1名、非看護系1名）

H16年度は8名採用パートタイム(週35時間以下・予算が不足したため)（内訳看護系6名、非看護系2名）

H17年度は12名応募（内訳は看護系9名、非看護系3名）、うち10名採用（内訳看護家8名、非看護系2名）

H18年度は8採用（内訳看護系6名、非看護系2名）

H19年度は6名採用（内訳看護系5名、非看護系1名）

【支給額】千葉大学非常勤職員に準じて支給。業績・経験に応じて時給2,196円～2,255円

【学部における地位】COEフェロー室（新設）に所属するが、研究者として所属するサブプロジェクウトのリーダーが必要に応じて相談役になる。他にCOEフェロー連絡会を月1回開催し、全体研究の進捗状況を把握しかつ推進担当者との意思の疎通を図る。

2. RAの採用（もともとのRAとは別に採用）

【対象】千葉大学看護学研究科博士後期課程学生（14条特例学生は除く）

【選考方法】指導教官の推薦

【支給額】時間当たり1300円。ただし、予算総額に制限があるため、年間一人当たり200時間以内。

3. 謝金による研究協力者の雇用

【対象】千葉大学看護学研究科博士前期課程学生（14条特例学生を除く）

【選考方法】指導教官の推薦

【支給額】時間当たり950円。予算総額制限のため、1教育研究分野あたり年間500時間以内とした。

Ⅱ　若手研究者の人材育成を目的とした取り組み

1. COE全体研究会　及び個別研究会（サブプロジェクトごとの研究会）

⑴　対象：COEフェロー、博士後期課程学生、博士前期課程学生、教員

⑵　時期：H15年度～H19年度　頻度：月1回～4回

⑶　内容：COEの目的、各サブグループの研究の進捗状況、海外研修報告、メタ研究方法の検討

2. 招聘外国人研究者による講義

⑴対象：博士後期課程学生、博士前期課程学生

⑵時期：不定期（外国人研究者を招聘したとき）

⑶方法：日本語は使わず英語のみでプレゼンテーション及び討議を行なった。

3. 英語の研修会

⑴対象：COEフェロー、博士後期課程学生、博士前期課程学生、

⑵時期：H17年1月からH19年3月まで

⑶内容：英語論文を書く能力を高める

4. 若手研究者の海外派遣

⑴対象：博士後期課程学生

⑵方法：公平を期するために在学中1人最低1回は1週間程度の海外研修を認める。予算に余裕のあるときはこの限りではない。原則的には教員に同行とするが、英語能力や目的次第で単独での研修も認める。

5. 特別研究奨励費の給付

若手研究者の独自の研究を行うことを課し、特別研究奨励費を設けた。対象となった若手研究者は年度末に研究報告書の作成と口頭による成果発表会を義務づけた。

⑴対象：COEフェローおよび看護学研究科博士後期課程学生

⑵方法：特別奨励費を設けて公募した。COEフェローの研究費は50万～70万であった。博士後期課程学生の研究費は20万であった。H15年度～H19年度にCOEフェローは30件、博士後期課程学生は34件の研究を応募した。

6. 英語プログラム（e-learningシステムの導入）

ALC教育社のALC NetAcademyを購入した。学内にサーバを設置し、インターネットによってコンテンツの提供が受けられるというもので、学習者は端末のPCで、それぞれのペースにあわせて学習することができる。看護学部教員、COEフェロー及び博士前期・後期課程在籍者全員が利用できるよう、IDとパスワードをそれぞれに配布した。

機関名：千葉大学　拠点番号：F05

２１世紀ＣＯＥプログラム委員会における事後評価結果

（総括評価）

設定された目的は概ね達成された

（コメント）

拠点形成計画全体については、当初の「日本文化型看護学の創出」という目的は概ね達成されたと評価できる。実践知を導くメタ研究手法を導入し、「関係性」「身体性」などの視点の焦点化を図り、得られた研究知見をもとに国際ワークショップなどを開催することで、文化比較を試み、その中でアジア圏に視点を向けたことは評価できる。

人材育成面については、ＲＡ（リサーチ・アシスタント）、ＣＯＥフェローの採用や特別研究奨励費などの設置による研究環境整備、国際的、学際的な研究能力の開発を意図した海外の１０大学との共同研究への参加機会と海外派遣、社会文化科学研究科修了者や東アジア圏学生の登用などの推進などは評価でき、その目的は概ね達成されたと評価できる。

研究活動面については、核となる独自研究成果にインパクトが不足しており、研究業績の量は増えているが、タイトルからも枠組みの強調にとどまった感が見受けられる。添付資料から、メタ研究の対象となりうる一次研究の質については、限界が大きかったことなども見受けられ、更なる成果については、今後に期待する。

補助事業終了後の持続的展開については、５年間で拠点形成は始まったばかりと思われるが、「文化看護学」が将来どのように展開し、看護の実践の向上に寄与するかは、本拠点事業推進担当者、育成された若手研究者の今後の努力にかかっており、一次研究成果の積み上げに併せて、概念化・理論化作業にも力を注いでいくことが望まれる。